# DANCEで育む「創造」と「協調」

Creation

Communication

文＝石原 久佳

## 未来を生き抜くダンスの「力」

ダンスは世界最古のアートでありコミュニケーションと言われている。ダンスの起源は主に3つ。祈祷的意味合いをルーツに持つアフリカンダンス、社会秩序や国家の威信を表わすポリネシア諸島のダンス、王族お気に入りのダンサーが物語を綴るヨーロッパのダンス。ダンスは言語より以前の原始的なコミュニケーション方法であり、最古のアートフォームであったと言われる。

いま学校教育が見直されているという。ネット社会や検索行動により、「知識」よりも「知恵」が求められている社会に急速的に変化した現代。知っているコトは皆平等。それらをどう選択し、どう組み合わせ、新しいアイディアを生み出すかという、イマジネーションやクリエイティブの能力がますます求められる時代になったのだ。そして、そのアイディアを的確に円滑に伝える力＝コミュニケーション能力を持った人材を今の企業は欲している。クリエイティブとコミュニケーション。日々スマホやタブレットでさまざまな情報を取得し続け、SNSでほとんどのコミュニケーションを済ませる現代社会で、果たして若者にそんな能力が身に付くのだろうか。

そこで現在、学校教育の中で授業や部活の分野でダンスが取り入れられ、盛んになっているのは時代の必然と言えるかもしれない。もしかしたら人間社会の本能的な「揺り戻し」なのだろうか。ダンス、そしてアート。これからの教育に必要な、これからの未来を生き抜く「力」が、極めて原始的な行為の中に潜んでいる、というわけだ。ある教育学者も、これからの学校教育にはダンスとアートの積極的な導入が必要である、と説いているという。何も学生全員をダンサーや芸術家にするというわけではない。ダンスを考え、アートを意識する行為が、若者にクリエイティブな能力を育てる基盤を作るということだ。

ダンス部の状況を見ると、練習や振り付けを自分たちで考えているという部活は意外なほど多い。時折、外部のコーチやOB・OGが指導やチェックにあたるのみで、部活の一つの目的である「自主性」を育てるには、あまり外の力に頼らないほうがいいという方針の顧問が多いためだ。まず経験者がダンスリーダーとなり、練習方法や振り付けを考える。作品にテーマを決めたい場合は、全員でアイディアを出し合う。曲はこれ、ダンススタイルはこう、構成はこう、衣装はこのイメージ……というように、ダンスの作品作りは、さまざまな要素のアイディアとその組み合わせのバランスによって左右される。振り付けは良くても衣装が〜、曲とダンスのイメージが〜、というようなバランスの悪さは、皮肉にも高校ダンス部の作品のひとつの特徴でもある。よく言われることに、キッズダンスはプロダンサーが振り付けにあたるために作品の完成度が高い。そして中高生になると、自分たちで振り付ける場合が多いために、作品の完成度は下がる、と。しかし、後者は「考える」行為、考える「自由」を得ている時点で、クリエイティブのスタートラインに立っているとも言えるだろう。自分たちで振り付けをやっているか否かは、筆者がコンテストで審査員をやっていても不思議とわかるもの。ステージからの発信力やエネルギー、伝わる気力や迫力がどうも違うのだ。

## 自分たちで創る「自由」

ダンスを覚えるにも何にしても、今は指導者や見本が溢れている時代だ。ダンスのレッスン場所や動画などはネット上を検索すればスグに見つかる。探す苦労が何もない。自由自在。しかし、ここで実は失われているものこそが「自由」なのだ。創造する自由、試行錯誤する自由、遠回りする自由、あるいは「間違える自由」を失っている。その昔は、ダンスも音楽も伝承文化だったため、時代や地域によって多少間違った解釈で伝わることが、かえって独自の進化や地域性につながったという。そういう意味で、今は間違えることが非常に難しい時代だ。ちょっとした間違いを指導者が注意する。わかりやすく説明して正す。当人が時間をかけて自分で気づく余裕は持てない。なぜなら「教え」に常に合理性が求められる時代だからだ。

見本がありすぎると、かえって不自由になってしまう。ダンスでも楽器でも、「自由にやっていいよ」というと、かえって今のコは不自由になる、とベテランのミュージシャンが嘆いていた。いわゆる、アドリブでのプレイ、「創りながら踊る」という純粋な行為が苦手になっているというわけだ。

だからこそ、冒頭に記した通り、ダンス部が自主性を大事にし、「自分たちで創る」ことは、取り組み方にしてもダンスそのものにとっても良い方向性だと言える。結果を追い求めることはモチベーションになるだろうが、ダンス部にとってのダンスの本質は、クオリティではなく「過程」にこそある。下手でもいい、間違っていてもいい、平均的でなくてもいい。自分たちで創ることで、責任感が生まれ、仲間とぶつかり、尊敬し合い、「協調」が生まれる。やりたいことを発見し、フォーカスし、具体化することで「創造」が生まれる。その時点で学生たちはすでにアートに触れているのだ。

若者がダンスに取り組むことが、ダンス以外の能力を育む。それがこれからの時代を生き抜く「力」となる。若者が、学校が、時代がダンスを求めているのは、やはり必然なのだろう。ダンス部の日々が、若者の豊かな人間性や感性を育て、そこで日本が世界へと送り出すことのできる未来が萌芽していること。その「希望」を伝えるのが、本誌の使命だと考えている。